フィールド風（現場）からの537

宮田守男

3月下旬から4月上旬にかけて、太平洋側に前線が停滞しやすくなり雨が降る機会が多くなり花の開花を促すように降る「催花雨（さいかう）」が春の訪れを実感させる時期でもある。

自然界が目覚める時、なぜか人は眠くなり中国唐時代の詩の一節「春眠暁を覚えず」の言葉を口ずさんでしまう。春は夜の寝心地が良く、朝が来たことも気づかず寝静まってしまう意味だが、歳を重ねるごとに昔の出来事を夢の世界で訪ね歩くのか、熟睡できなくなっているのは私だけなのだろうか。

毎日届く「加藤和郎とI-media情報長屋」の情報。今回は長野県が明治40年に「女子教育の有給休暇を実施する事を決定」し、施行。いわゆる「産休」の制度だ。文部省が大正11年に産前産後の有給休暇を認める訓令を発したことを考えると、なんと長野県は先進的で、教育県と呼ばれる理由の1つだとの情報だった。加藤さんはNHK長野放送局在籍中、県庁記者クラブに所属の記者でもあったが、今歴史的事実を初めて知ったと驚きのコメントが印象的だった。

少子化対策は地域の最重要テーマだ

少子化対策が求められている今だからこそ、長野県が取り組んできた歴史を再認識すべきではないだろうか。少子化対策に関し岸田首相は「時間との闘い」と強調している。

「人口減少時代を乗り切る戦略を考える議員連盟」の設立総会で一般社団法人・人口減少対策総合研究所の河合理事長は「出生数の減少は最低でも一〇〇年は止まらない。今から少子化対策を講じても、人口減少が進むことを前提として、社会をどう機能させるのか、対策は即座に求められる」と訴えている。

人口減少に伴う推計が危機感を増幅させる。5年後に団塊の世代が80代を超えると、介護が必要な人が一気に増え、介護人材が不足して年配の職員が引退する一方で人材確保が難しく、孤独死や介護離職が増えるとの推計や働き方改革を含め運転手不足が深刻化し、わずか7年後の30年に国内で35％の荷物が運べなくなり配達できない日が増え、配達料金が値上がりする推計も公表されている。

コロナ禍で経済環境が一変した中で、大きなくくりでの連携が求められている。経済学でも企業や事業も永遠はなく「創業から30年」が節目とも言われている。地域の生き残りへの取り組みへの道標を示す認識を期待したいと思っている。

（信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上）

畔にはフキノトウが一気に咲きだす。健康を兼ねたウォーキングを楽しむ季節到来だ。